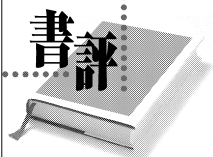


書評



浜田 晋 著

街角の精神医療 最終章

兼本浩祐

窓の外に広がる辺境の記録と思い

終わりを全うするというはどういうことだろうか。勲章をもらうことか、それとも教授や大病院の院長などの役職を歴任することか。最終章と副題を打たれた本書の終わりにはチャーホフの『桜の園』が引用されている。

「上野も半ば崩壊した。私もこの地を去っていく。どこかへ」という最後の言葉は、三十年の苦闘の歴史をこれと言って誇るでもなく、冷徹に現状を眺めながら、しかしそこで本当に根をおろして生きてきた人だけが語ることができる感慨に満ちている。本書には、すべてがもう変わってしまい自らも年若いながら、生きることはそれでも良いことだったと『桜の園』で思うチャーホフの終章が確かによく似合っている。

「おもしろうてやがて悲しき」という言葉があったような気がする。本書はその大部分において、ひたすらに著者が長年付き合い続けた人たちの記録であると言ってもよい。精神医学的に操作的な診断をして統計をとるならば、その多くは平凡でありふれた一症例に過ぎなくなるであろう。しかし、本書では一つ一つの症例の統計上の数字の一に還元できない一期一会性、あるいは非凡さが見事に描出され、一度読み出すとやめられないおもしろさがある。そして、この著者の著作が常にそうであるように、この膨大な量の事実の記録の集積は、読み進むにつれて何よりも私自身の立ち位置を無言のうちに問いただし、私自身のさまざまな悔恨を思い出させ、私をたじろがせる。よく生きたからこ

そ、『桜の園』の桜はあんなにも美しかったに違いない。本書で登場するすべての人たちは千差万別でありながら、死んだ人も生きている人もよく生きたという一点において共通しているのである。

本書を読んで思うのは、精神科医療というのはやはり基本的には辺境の医療だということである。本書で登場する多くの人たちは、物理的には市民社会の中に住んでいながら、時にその人たちの住んでいる所は奇妙な無医村でさえあって、だから街角に生きる医者は無医村の医者のように何でもしなければならぬ。精神科の診察室を訪れる人たちは、症状とともにその背景にある人生を引きずってやって来る。精神科医が他の身体科医と際立って違うのは、症状とともにいつでもその背後にある家族や職場や生い立ちといった人生をみる二重の目線を持たねばならないことであって、診察室を治療の主要な舞台ととらえるのか、それともそこをその奥に広がる症状の背景を見渡すための窓と見るのかによって、見えてくる風景は大きく違ってくるに違いない。診察室を訪れる人たちと同じ目線で窓から外を眺めれば、そこは生き抜くことがそもそもとても大変な辺境が広がっている。訪れて来た人たちとともにこの辺境に三十年以上暮らしたからこそ、よくお互い生き抜いたという実感は生まれるのだろう。桜の美しさはよく生きた人たちだけに贈られる饒なのだと思う。

(愛知医科大学精神科学)

● A5 336頁 2006 定価 3,780円 (本体 3,600円+税) 医学書院